

グレイの日記帳

廓然大公

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

グレイのパジャマパーティー

Yet Tea グレイの日記帳

Party | 目

次

グレイの日記帳

「改装工事、ですか？」

今朝がた管理人であるクリシュナより伝えられたのは下宿先のこの建物に改装工事を行う事となつたという連絡だつた。地震も無く酷い天変地異も起こりにくいもののやはり台風の被害などは避け得ない。古い建物も多く残るロンドンではあるもののその建物もやはりメンテナンスあつてこそでもあつた。そしてそれはグレイの住むこの寮もまだ避けられない修繕でもあつた。一日がかりの修繕工事、それはつまり丸一日家には帰れないということでもあり、同時にそれは今晚、どこかに泊まらねばならないという事でもあつた。

「そうはいつても」

尻すぼみになる言葉、ロンドンに来て日も浅いグレイにとつてここはまだ異郷の町、知り合いも両の手を使えば足りる程で、そしてもちろん頼れるような親類がいるわけもない。モーテルなどの安宿ならば泊れないことは無いだろうが如何せんノーリツジの敷地と師であるロードエルメロイ二世の居室からは些^少か遠くになつてしまふ。元よりあまり知らない宿に泊まるということ自体がコミュニケーションの苦手なグレイにとつてはあまり得意なことではない。そのくらいならば野宿の方がましと考える程でもあつた。

『ホテルに泊まるのが怖いですってんで大都市ロンドンで野宿するつてのはさすがに笑い話にもならねえぜ』

アツドにもそう茶化されながらしかし、今日の宿が決まることは無い。本来ならば少し前に伝えるはずだったものの、数日前まで師と共にスコットランドの方まで出かけていたために伝えそこなつてしまつたという事だつた。管理人にも責任の一端はあるということで心優しくも部屋の荷物は大家の家の倉庫を間借りさせてもらうことにはなつたものの生憎とベッドまでは用意できないと言われてしまつた。そのために今日はいつもと違い、肩から小さめの旅行鞄が下げられていた。

いつものように師の部屋へと向かう道すがらいつもより濃い霧の

町に深いため息が一つ流れられてそして消えた。

「その旅行鞄はなんだ」

「えつ」

師であるエルメロイの寝起きは悪い。内弟子としてここ数カ月ほど起こしに来て入るもの緊急時や警戒時でなければ夜遅くまで資料や本を読みふけり、今のソファに崩れる様に寝ていることも多く、そしてやはり睡眠時間が足りていなか朝は幽鬼の様にぼんやりとしていることが多い。そのため持つて来た旅行鞄を早急に隠してつもりではあつたのだが見つけられていたらしい。目ざといとうか、がめついというか。

「いつもの荷物にしては多いな」

「えつと」

ベーコンと目玉焼き、そしてトーストというオーソドックスな朝食を取りながら聞いてきたその言葉に咄嗟に口ごもつてしまふ。元より口数が多い方ではない上に、決して嘘が上手なわけでもない。悪いことをしているのではないものの罪悪感がのしかかって来た。探る様な彼の視線、フル回転する頭に浮かび上がつて来たのは先日見た雑誌の一文。いつもより痛く感じた何か、喉に詰まりかけたトーストを何とか飲み込んで代わりに出てきたのは

「おつ、乙女のひみつ、です」

「はえあ」

明らかに尻すぼみになつていく言葉は最後まで聞き取れたかは疑問が残るものその言葉にロードエルメロイは一瞬固まり、そしてすぐには咳払いをすると

「そうか」

と一言だけ声をかけて早々に朝食を済ませた。グレイというよりもレッドとなつた少女も又そそくさと朝食を済ませていく。

ああは言つたものの、彼に頼めば一晩くらいはどうとでもしてくれるだろう。ノーリツジの彼の居室でもこの部屋でも、もしかしたらわざわざホテルを用意してくれても彼の性格から考えれば不思議はない。しかし、グレイはそれをよしとはしなかつた。それではあの頃と

変わらない。ロンドンに出てきた意味も、師が手を引いてくれた決意も又鈍つてしまう。

そんな気がしたからだつた。

ふと部屋の奥の方から水の音が聞こえる。師がシャワーを浴びているらしい。ふと我に返ると残された食器を持つて台所へと入つて行つた。

そして何事も無くいつものように日々も過ぎていつた。魔術師でなく、またもとよりよくもないこの頭では理解することも難しい魔術、エルメロイ教室でなければその一端ですら知り得ないようなものではあるものの、今日は何時にもまして頭に入つてこないのは傍らに置かれた今日の分の着替えの入つた鞄であることは間違ひなかつた。

昼下がり、ノーリツジのキンパスから少し離れた公園のベンチで一人サンドイッチを食べる。エルメロイは先程唐突にロードバリュエレータに昼食に誘われたらしく、ただでさえ深い眉間に皺をマリアナ海溝の様に深く刻み込みながら胃のあたりを抑えながら出掛けを行つた。ロード同士の話もあるのか、同行はしなくていいと言われたために一人のランチタイムとなつていた。

「どうしよう」

そんな彼女を少し離れた物陰から見守る怪しい人物が二人。

「なあフラット、やっぱりグレイたんは何か悩んでいるようだな」

「そうだねルシアン君、確かにあの顔は何か悩んでいる顔だね」

「朝からグレイたんの甘く切なやわやわな香りに少しだけ不安のしょっぱい匂いを感じる。それも濃い程ではないから昨晩からではなく、今朝、時間にすれば朝の七時ごろからこの不安は始まつたと考えられるつまり今朝からグレイたんは何か悩んでいるわけだ」

「言つてることもやつてることも一步間違えればというかもう間違えなくとも捕まるレベルの変態だね、ルシアン君は」

「もはやこの国の法など、ラブリースイートグレイたんの前にはちり紙と変わらない」

「この国すらも敵に回すとは馬鹿みたいだけど、僕としても学友が何

か悩んでいるなら解決したいのはやまやまなんだけどなあ

「それでフラット、グレイたんは何を悩んでいるんだ」

「そうだなあ、いつもは持つてない鞄、先生に同行するには少し、今日一日中持つているつてことは何か大切な物とか」

「アーティファクトのようなものでは無いみたいだぞ、いつものグレイたんの柔軟剤の匂いしかしない、着替えじゃないのか」

「通報してもいいレベルだけどそう言う事ならあの量なら一日分の着替えかな。そういうえば女子寮のあたり改装工事があつていたはずだけど」

「つまり、グレイたんは今日改装で家に帰れないから一晩の宿を探しているわけだな」

「そう言う事だらうね、先生に言えばいいのに」

「それが乙女心というものだ、つまりここでグレイたんの宿を確保することが我々の使命という事ではないかねフラット君、そうすれば先生からもグレイたんからの評価もうなぎのぼりという事だ」

「そう言う自分の欲望に素直なとこ好きだよ、ルシアン君」

がつちりと腕を酌み交わす二人の雄たけびに辺りの木々が揺れた。軽く獸性魔術による咆哮とそれを軽く貶すという目に見えない攻防の後聞こえたのは新たな年若い男の声だつた。

「うるさいぞ、一人とも。まったくもうすぐ授業も始まるんだから馬鹿騒ぎもそこまでにしておけよ」

「おう、カウレスちようどいいところに来た。これからそこにいるグレイたんの宿をだな」

「そこつてどこだよ」

「あれっ」

二人の視線の先には既にグレイの姿は無い。食事を終えたか、それとも不穏な気配を感じたか、少なくとも二人に築くことは無くその場から去つてしまつたらしい。

「しまつた、見失つた」

「探すよりも宿の手配の方が先じやないのか」

「でも宿つてどんなだ、ホテルとかか、さすがにスイートとかとつても

グレイたん引くんじやないか」

「そういうところで妙にへぼくなるねルシアン君、女の友達とかの家とかを紹介するとか」

「いるか、そんな女子」

「僕は知らない」

「駄目じやねえかつ」

二人の喧騒をよそにカウレスは一人小さくつぶやいた

「宿ねえ」

昼休み終わるとエルメロイはそのまま会議へと赴いて行つた。ノーリツジの私室に残されたグレイは部屋の掃除をしながら考え込む。依然として宿は決まらず、既に昼を回つてしまつた。いくつか手の届きそうなモーテルに電話をしては見たものの団体客が入つたらしく既に満員らしい。宿直室というのがあるならばそこを借りるのだが生憎、そんな部屋があるのかは知らない、増して宙ぶらりんの自分が使えるのかも疑問だ。無心で部屋の掃除をすることで問題を先延ばしにする。

中途半端で、どつちつかずの灰色、

あの頃から変わつていない、こんな小さなことでさえも。

「拙は」

自虐的にそう呟いた瞬間であった

「失礼しますわ」

唐突に開いた扉と声に思わず飛び上がる

「ルヴィアさん、どうしたんですか、突然、師匠なら今会議中で」「構いませんわ、今日はグレイ、あなたに用があつて來たのですから」「拙に、ですか」

「ええ、あなたにしか頼めないのです」

神妙にそう言うルヴィアにグレイは近づいて行く。

「捕まえた」

そして子猫でも捕まえる様にルヴィアはグレイの胴を掴み上げるとそのまま部屋から出て行つた。

「クラウン」

「承知いたしました」

「ルヴィアさん、部屋が、拙は」

「火急の用ですわ」

ルヴィアはそう言うとそのままグレイを連れて出掛けた行つた。

「うーんこれもいまいちですわねえ」

「ルヴィアさん」

「こつちは、かわいらしくはあるのですけど色味が華美ですわね」

「ルヴィアさん」

「こつちは、及第点位ですわね、でももう一声、それじゃそれとそれとそれ」

「ありがとうございます」

「ルヴィアさん、これは」

ルヴィアに連れてこられたのはまさしく高級ブティックと言う奴だつた。あたりに客は無く、代わりに数人のコンシエルジュと大きな鏡、そして試着用のスペース、そしてそこには来たことも無い様なネグリジエを着せられているグレイとそれを評価し次々と着せ替えるルヴィアの姿があつた。

「あ、あの、火急の用とはなんなのでしようか。それに拙にはこんなに買える余裕はありません」

「あら、グレイ、この私をルヴィアゼリッタ・エーデルフエルトと知つての言葉かしら。それに私が買うだけよ。あなたは私の代わりに試着しているだけ。そして、たまたま私には入らないからあなたにおさがりとしてあげているだけよ」

「そう言われても」

ルヴィアはグレイの唇に指をあて言葉を封じた。

「グレイ、そう言うときには何というか、この前教えたのではなくつて」

微笑みかけるルヴィアにグレイはその言葉の先を無くした。

「あ、ありがとうございます」

「よろしいならばこれをつけておきなさい」

そう言つて渡されたのは小さな髪留めだつた、金色の小さな百合意

匠を凝らした中心に小さな蒼いサファイアの髪留め。銀色の彼女の髪には良く映える小さな髪留めだつた。

ルヴィアは満足そうに頷くと同時に向かつたのは次の店だつた。

ようやく解放されたのは既に四時を回つてた。ロンドンの街中、ダウンタウンの中に一人、衣服たちは軽くグレイに補正し直して後日アパルトマンに届けてもらえるらしい。おかげで手荷物は無いものの間のグレイにとつては少しばかり手持無沙汰でもあつた。

「泊めてほしいって言えばよかつたな」

一人ごちるグレイが聞いたのはまたしても見知った声だつた。

「あら、グレイじゃない」

「凜さん」

見つけたのは赤いシャツを着た遠坂凜の姿だつた。どうやらその姿は買い物の途中らしく既に小さな袋をいくつか手に持つていた。

「ちようどいいわ、手伝つてもらえる」

「は、はい」

流されるように返事をして歩き出した先にあつたのは近くのマーケットだつた。華僑たちの住む中華街にもほど近いその一角にはいつもロンドンとは違う多くの香辛料とそして様々なエキゾチックな食べ物の匂いが漂つっていた。雑多な市場の中をトオサカに連れられて進む。中国なまりの英語と、本物の中国語が聞こえてくる。朝一ではないためかあまり混雜しているとは言えないもののそれでも気を付けなければ人にぶつかってしまうほどの人の波の中を何とか抜け出していく。見たことの無い異国のような町と人と匂い。雑多でありながらも生きた人間の色を感じる街。知らなかつた、自分一人では知り得なかつた新たな道。

「グレイ、何しているの」

「はい、すぐ行きます」

自らその喧騒の中へと飛び込んでいった。

「芝麻醤まで変えたのは良かつたわね、英語だとタヒーニだつけ」

「それについても随分と買いこむのですね」

「まあね」

一時間弱の買い物の結果、遠坂とグレイの手にはそれぞれ二つずつの紙袋が下され、さらにはグレイの手には鍋に入った大きな木綿豆腐も抱えられていた。

「時間もあまりないし胡麻団子と焼売でいいかな、まあ、麻婆豆腐には罪もないし」

少し意味深に豆腐を見つめる遠坂に少し疑問の視線を送るとするにいつものように何でもない、と笑っていた。

「拙の不勉強で気分を害されたら申し訳ないのですが、凛さんは日本人でしたよね。それでも中国料理の材料を探しているのは何か理由があるのですか」

「ただ、得意ってだけよ。それに日本料理という家庭料理なら私より上の奴も知ってるしね。どつちかと言えばこっちの方がすっぱりさっぱりしてて私好みってだけよ」

「なるほど」

確かに遠坂の性格からすれば繊細が日本料理というよりも火のようく大雑把に燃え上がる中国料理の方が性に合っているようにも感じた。

「グーレーイー」

顔に出ていたのか遠坂はいたずらっ子のような視線を向けグレイに覆いかぶさる。

「あ、いや、拙は、ごめんなさい、豆腐がこぼれてしまします」

「あつ」

唐突に止まつた遠坂に疑問を感じ振り返ると彼女はおもむろに背を向け何やら「こそやつて」と言っているらしい。再び振り返った時、感じたのは少しだけ首元がすつきりした、そんな感覚だつた。

「グレイ、ちょっと来て」

疑問符を浮かべながらも近づいて、そしてするりと遠坂の手がフードの中、首元へと差し込まれた。突然の行動、しかし手には豆腐、成すがまま、されるがままの状態。

「これでよし」

そう言つて抜かれた手、気が付いたのは自分の首元に小さな赤いル

ビーのペンドントが下げられていたことだつた。

「こんな高価な物いただけません」

「荷物運びのお礼、私のおさがりだけどまあその分、思い入れで補完と
いうことで。あの女にマウント取られるのも癪だしね」

「すいませんがなんとおっしゃいました」

「なんでもない、なんでもない。その代わり今日はもつと荷物持ちし
てもらうぞ、それじゃ出発」

じやれつきながらも姦しい時間は過ぎ去つていく。

最終的に解放されたのは既に午後五時を回つたところであつた。
すでに日は落ち、ノーリツジ近くまで戻つてきたはもののやはり今晩
の宿は見つからない。声をかけていれば、そんな小さいことも出来な
い、墓守が墓穴を掘るとは洒落にもならない。

「ああ、グレイよ、そんなところで何をしている」

「ライネスさん」

そこに立つっていたのは師であるロードエルメロイ二世の義妹であ
るライネス・エルメロイ・アーチゾルデだつた。

「いえ、ちょっと買い物に」

「それにしては羽振りが良いようだね」

「いいえ、これは」

「まさか、わが兄からの贈り物とか」

「そんな、滅相も無い」

取れるかというほど首を振るグレイにライネスは笑う。

「冗談だ、さてそれはいいとしてちょっと付いて来給え」

「えつ」

困惑するグレイをよそにライネスはグレイと共に用意していた車
に乗り込むとゆつくりと進み始めた。

「あの、拙は荷物を取りに戻りたいのですが」

「荷物とはこれの事かい」

そう言つてライネスは小さな鞄を取り出すと断りもなくチャック

を開け、中に仕舞われていた寝巻を取り出した。

「グレイ、いくら気安いとは言つてもこれはもう布だ。服ではない、そ

れにもとより可憐なる婦女子がこんなものを着て言い訳は無いだろうに」

それはグレイがあそこにいた頃からの寝巻、それ以外には持つていなかつた寝巻、それ以外には与えられなかつたもの。

「まあ、ルヴィアに揃えてもらつたのならいいだろう」

「なんでルヴィアさんのこと？」

その言葉を言い終わる前に車は止まつた。たどり着いたのはエルメロイの邸宅。つまりライネスの家だつた。そのまま案内されるよう家の中に入ると電話を持つた一人の使用人が近づいてきた

「さて、そう言うわけで君に電話だ」

ライネスに言われるがまま取つた電話の先から聞こえたのは効き慣れた師の声だつた。

「ライネスに殺人予告があつた、今日は護衛がてらそちらに泊まるといい」

「師匠、それはどういう

「詳しくはライネスから聞くと言い、そう言う事だ、お休み」

そのまま切れた電話、受話器を見つめているとライネスが小さく笑いだした。

「何、カウレスから殺人予告をもらつてな、私は今日怖くて一人ではおちおち眠れんのだ。だから今日は私の護衛としてこの屋敷に泊まつて行つてはくれないか」

「そう、差し出されたのは白く気高い手だつた。

「まつたく、グレイにはもう少し友人というものについて勉強しなければならないようですわね」

「久しぶりに中華鍋を振つてないと勘も鈍るしちょうどよかつたわ。それに一晩泊めてほしいなんて気軽に頼んでいいのよ。まあこの女に頼むのはあまり勧めないけど」

「あら、あなたみたいに後輩にネグリジエの一つも買ってあげられない人のセリフとは思えませんわね」

「なんですってえ」

「二人とも喧嘩しなーい」

そこに揃っていたのはエルメロイ教室の女たちだった。

「何、今日は無礼講、知ってるかい、こういうのを日本ではこう言うんだってさ。」

パジャマパーティー

「ありがとう」

長くも姦しい彼女たちの夜が始まった。

Yet Tea Party

一人用の小部屋に少女の声が聞こえる。

「テーブルよし」

木目の綺麗に流れているテーブルには真新しい綺麗なクロスが書けられている。

「椅子よし」

テーブルと同じ色調の椅子破れもなく、木の光沢が見てとれる。

「ティーセットとカップも良し」

ワゴンに準備されている茶器は磨き上げられシミの一つも残つてはいない。

「お菓子とお茶はあとでエミヤさんが届けてくれる」

あとは

「内装は」

「今更変えようもないだろうがなあ。まあどれだけ準備しても出迎えるのが一般庶民のグレイならそれだけでどんな粗相をするか今考えただけでも楽しみだぜ」

西洋のアパルトマンの一室を模したようなその部屋の中、少女の声のほかにきいきいと甲高い笑い声が響く。

「アッド黙つて」

「同居人としていくつかアドバイスでもしてやつてもいいが代わりに俺にも茶の一杯くらい出してくれてもいいんだぜ」

懐から取り出した大きな鳥かご、中では立方体の友人がいつの間にかくすねていたティースプーンをかじつていた。

「その前にまずスプーンを返しなさい」

「まあその前にお茶を振る舞う友人がいないものな。おつとこれは図星をついちまつたかね。ひいひい怖い怖い。俺は口を出さずにお前が慌てふためくさまを楽しむとするかね」

少女は大きな鳥かごをそのまま大きく振った。甲高い悲鳴と鉄がぶつかるような音、引き換えに軽口も消える。

「どこまで確認したんだつけ」

再び少女は小さくつぶやきながら再び部屋のあちこちを指さし始める。そして間もなく聞こえたのは小さなブザーの音。来客を告げるブザーの音だった。

「は、はい」

急いで玄関へと急ぐ少女、ゆっくりと開いた扉の先には小柄な赤毛の若き征服王が立っていた。

「今日は突然の誘いを受け入れてくれてありがとうございます」

「い、いえ、狭いところではありますがそれでもよろしければ」

「もちろん、ところでその手に持ったスプーンはどうしたんだい」

「へえっ」

右手にはいまだ少し歯型のついたスプーンが握られていた。懐から小さく笑い声が聞こえた。

かちやん

手にしたカップが音を立てた。

白の陶磁器に金の衣装が施されたそのティーカップは大方ライネスが用意させたことには間違いないだろう。それだけで自分の一か月の生活費は賄えてしまえることは難くない。目の前に広がるティーセット全て合わせればそれだけで彼女の財産とその身の上で質に出したとて届かないほどの物たちが並んでいる。今日の茶会のためにライネスより借りた品々。本来自室に置かれている小物とは比べ物にならない品にそれだけで自室だというのに居心地が悪く感じる。

茶器だけでなく、その葉もまたいつも師であるロードエルメロイ二世が飲んでいる三級品などとは比べ物にならないような馥郁たる香りが広がる。エルメロイ邸で飲んだことのあるものに近くはあるもののそれに引けを取ることはないほどの一級品であるということだけは分かる。

ただし微かに感じられる神氣はそれが現の物ですらないことを表

していた。サーヴァントになつたことで少しだけ鋭敏になつた感覚はその気配に二つの存在を感じ取る。シユメールの赤き女神とギリシアの青き女神、そのいさかいがそのディーカップ越しに見えるようだつた。

「うん、これはやはり良いものだね。何やら不穏な気配を感じないでもないけれど、この茶葉自体はとてもいい」

「そろいつていただけるとありがたいです」

カルデア内にあるグレイの自室。時計塔現代魔術科の寮にある自室にできる限り似せた内装、板張りと木造のような小さな一室。グレイの座るテーブルの対面には若き征服王の姿があつた。

「確かにオケアノスの果てにこれがあるならばそれはさらに楽しい旅になりそうだ」

彼は手にしたカツプから紅茶の香りを楽しむようにすんすん、と小さく鳴く。まだ少年のしなやかな手に握られたティーカップは少し彼には大きく見えた。

アレクサンドロス三世

古代マケドニアの王であり、エジプトやアジアにまたがる大帝国を築いた若き王。アリストテレスを師とし、その東方遠征は後世に多大なる影響を与えた人類史に刻まれた大英雄のうちの一人。
そして

「これは君が作つたのかい」

盆に並べられたクッキーを一枚とると彼は口の中へと放り込む。ラングドシャの軽い破碎音が聞こえる。中に入れたマーマレードのジャムの甘さに驚いたのか、彼は少し目を丸くした。

「い、いいえ。私は多少手伝つただけでほとんどはブーディカさんにお願ひしたんです」

「じゃあ、ブーディカがキミからは何も聞かずに気をきかせてこのクッキーを焼いてくれたのかい」

「私がクッキーを焼きたいとお願いしたのです。拙は不得手なのでは

とんどブーデイカさんと所長さんが焼いてくれたようなものなのです

「なら君が焼いたクッキーだね」

グレイはそんな言葉に少し困惑したように眉を顰める。グレイがしたことなど一度計量を失敗し、二度成型を失敗し、三度焼きを失敗した程度。大きさにも彼女が焼いたとはいがたく、むしろ足を引つ張つてしまつたとすらいえる。彼はそれに気づくと笑みを浮かべた。

確かにキミの言うようにこの小麦粉だつたものをクッキーへと変えたのはほどんどブーデイカと所長なのかもしれないけれど、それはあくまで君が作ろうとしたからさ。そうでなければこれがクッキーにはならなかつた。パスタやパン、別の物になるかもしかなかつたものを君がそう動いたことでクッキーにした。だからこれは君が焼いたクッキーでいいのさ」

「そう、ですか」

そして彼はふと思いついたように立ち上がりとその手を胸に当て居住まいを正す。突然立ち上がつた彼の姿にグレイも又飛び跳ねるとよう立地上がつた。

「そりいえばちゃんと自己紹介がまだだつたね。今日は突然の誘いを受け入れてくれてありがとうございます。僕はアレキサンダー」

「拙はグレイといいます、よ、よろしくお願ひします」

差し出されたその手を取る。

別名イスカンダル

師であるロードエルメロイとともに第四次聖杯戦争を駆け抜け、そして師が追いかけた続けたかの征服王の姿だつた。

「何故拙をお誘いくださつたのかお聞きしてもよろしいでしょか」少し遠慮したような、いいやおびえているような声に彼はふと視線を向けた。事の発端は三日前の午後のこと、マスターや他のサー

ヴァンタたちとの演習を終えた時、彼から唐突にかけられたお茶の誘い。しかもこちらがホストという青天の霹靂のような申し出。グレイとてカルデアに来てから他のサーヴァントとの交流もないというわけではないものの、王侯貴族まして自分でも知っているような英雄と言葉を交わしたのは量の手で足りるほどだった。誘いの後、行きつく暇もなく風のように去つてしまつた彼の唐突な申し出を断るわけにもいかず、師に相談するも『好きなようにするといい』という一言のみ。ライネスやキヤット、パールヴァティーといった面々に師事を受け何とかこの席を取り持つている。コミュニケーションをとることすら不得手な彼女にこの状況はいささか荷が勝ちすぎているようにも思えた。

「単に話してみたかったから、という答えでは満足してはもらえないかもしれないかな」

彼はそういうと少し考えたように唸ると盆の上に載つていた小さなスコーンを二つ自分の皿へと取り寄せた。

「第一の目的は先生のことかな」

「先生、とはロードエルメロイ二世のことによろしいのでしょうか」「そう、先生の内弟子とはどんな人なのだろうって思つたんだ」

諸葛孔明の疑似サーヴァントとしてカルデアに召喚されたロードエルメロイ二世、その数奇な縁によつて彼はこの若き征服王とともに行動することが多い。追い求めた背中が小さくなり、さらにはその少年が自分に師事しているという奇妙なサイクルに彼の額の皺を少しだけ薄くした事に気が付いたのは少し前のことだつた。

「彼は普通の英靈とも違うからね。英靈の力を持つた疑似サーヴァント。本来持つてはいない力を持った人間、非凡なる凡人とまで言つたら先生もすごく嫌な顔をするんだろうね」

確かに日頃から自分を客観視し自分の凡庸さを嘆く上にそれでなおその評価を受け入れていてる彼、その正当なる評価には忸怩たる思いを秘め、マリアナ海溝よりも深い皺を作る様子などありありと想像できる。あまりにも鮮明に思い浮かんだ師の表情に少しだけ笑う彼につられてしまう。

「確かにいつも何かしらに怒っているような顔をなされています」

少年はその言葉に大きく頷くと自分の眉間をつまみ大きく皺をつくる。

そして少年は言つた。

「サー・ヴァントになつたんだからもう少し誇ればいいのに」

「それはちがうと思います」

自分でも大きくなつた声に驚いた。こぼれるように出たのは否定の言葉。自分でも知つていて英雄に対する斬り返しの言葉。自分で意図していなかつたように自然と出たその言葉にグレイ自身もその言葉の意味に気が付くとすぐに取り繕うと言葉を探す。

「どうしてそう思うんだい」

しかし、かの王は言葉を選びあぐねているグレイより先にそう言った。いつものように少年のような傷つくことのないまつすぐな目をしたまま。

「あ、あの人人は多分どれほどの力を与えられたとしてもそれを自分の物にはしないのです」

葉巻を根元まで吸い切るような貧乏性で、

自分の格好なんてお構いなしで、

その癖に人の厄介ごとまで背負い込むお人好しで、

そして

「師匠は自分が自分が誇れる自分になりたいんだと思います」

少年のようにただ夢を追う男の姿を。

「それはいいね」

グレイの言葉に彼は大きく笑つた。ただ面白そうに、愉快そうに。

「自分が誇れる自分か、随分とまあ大きく出たものだ」

「そう、でしようか」

笑い続ける彼にグレイは失言でもしたのかどうろたえる。笑いすぎたというように少年は目元をぬぐい少し息を整えると「ごめんねと少し謝りながら言つた。

「人間は完璧じやない。だから何かを成そうとするときにどこかで区切りをつけて誤魔化す。けれどそのごまかしがきかない人間が一人だけいる。何を目指し、それまでの工程を知り、どこで諦め、何をこまかしたかを最も知っている人間が」

彼はそういうて自らを指さした。

「自分」

「そう、自分は誤魔化したことを知っているからね。つまり君の師匠は自分がいれば完成しない完璧を求めてそれでなおその完璧を目指すといつてるんだ」

「それはおかしいことでしょうか」

その言葉に彼は大きく首を振った

「それでこそ生きるというものだよ」

彼はそういうとまた紅茶へと口をつける。

「一つお聞きしてもいいでしょうか」

「もちろん」

気持ち大きな声で問いかけた。

「アレキサンダーさんは師匠をどう思っているのですか」

少しだけその言葉に彼は眉を顰め考えこんだ。腕を組み少しだけ暫しの間うなり声をあげる。

「難しい質問だけどそうだね。一言でいうならば、どうも思つていな
い。かな」

「どうも思つていない、ですか」

こともなげに言つたその言葉にあつけにとられる。あまりにも軽く、そしてあまりにも乾いたその言葉に少しだけ何かがチクリと傷む。

「師というならば彼よりも優れた師も劣つた師もいろいろと見てきた」

彼の教育をしたというのはかの哲人アリストテレス、グレイでもそ

の名を聞いたことのある賢人。比較とするならば如何にロードといえども分が悪い。

「確かに諸葛孔明としての戦術もそして彼自身の知識も一級だし教師として申し分ない」

しかし

「その知識の末の体験は彼自身だけの物だ」

少年はあつけらかんと言つてのける。あたらしく注がれたレモンティーの酸味がお気に召したのか少し輝いたようにそのカツプをする。

「知識はその体験を得たときにはじめて息づく。彼らが何を想い、何を願い、何のためにその知識を見つけたか、そして何を成しえ何を成しえなかつたか。それは彼らだけのものだ。どれほど言葉をつくしてところで語り切れるものじやない。良きにしろ悪しきにしろそれがその生涯をかけたものならばなおさら」

大陸を渡り、大国を成しそしてそれもすべてただその我欲を成すために歩む彼は言う。

「だから自分の足を進めなければそれは僕にとつてはどれも等価なものなんだ」

それにね、と彼はいたずらが成功した子供のように顔をゆがませ笑つた。

「人間が生きた旅路なんだ、聞くよりも自分で歩むほうが楽しいだろう」

透明なティーポットの中、ジャスミンの花の匂いとともにゆつくりとその花が開いていく。小さな紫色の花がゆつくりとその色を濃くしていく。

「そういう意味でいうなら今回の入理焼却は不謹慎かもしけないけれど僥倖でもあつた。本来召喚されるのはアレキサンダーではない。征服王イスカンダルだからね」

少し恥ずかしそうに言う彼。誰にも言わないでほしいと続けられたその言葉にうなづくと彼はその紅い瞳でじつと見つめながら語る。

「サーヴァントは本来、全盛期の姿で召喚される。オケアノスを求め

世界を駆け抜けた征服王イスカンダル。いざれ経験することでありけれど二度と経験することはない旅だ』

英靈に進歩はない。成すべきを成し、人類史に刻まれた過去の亡靈たち。

すでにその身は未来を歩み切った者たち。

ならば眼前の少年がかの約束された道を征服の道を歩むことはない。

「確かに知識として征服王の記憶もある。実感はないけれど確かにその知識はある」

「それはお辛くはないのですか」

その言葉を口にして少しだけ後悔する。死靈相手ではない。どれほど人の領域に踏み込んでよいのか、それだけ人に近づいていいのか。まだその自信が持てない。その機微を読み取つたのか少年はさして気にした様子もなく少年は笑つた

「ぼくの愛読書にイリアスがある。ここにもいるような大英雄たちの叙事詩だ。他にも多くの物語を知り、そして憧れた。この身で歩めるのはたつた一本の道だけ。だから多くの書物が伝説が、そして英雄譚が僕に別的人生を歩ませてくれる。だから僕は自分の道を進むことができる」

懐から取り出したのは一冊の文庫本。ラテン語のかグレイには読み取れない。しかし彼は端の少しくたびれたその表紙をなでた。
『征服王イスカンダルの旅も又僕の物であり、そして僕の物ではない夢見る旅の一つ』

開き癖のついたページ、一か所ではなく、パラリとめぐれば突き当たるようなその旅路が広がる。

「それは僕の経験でなく、けれど僕が夢見た旅だ」
彼はそう言つてじつとこちらへと向き直る。

ああ、その目をよく知つている。

いつもは濃いくまと充血した不摂生ばかりのだというのに時折見せるその目を知つてゐる。

体力なんてない癖に、才能なんてない癖に、歴史なんてない癖に。

何度も怒り、嘆き、倦怠に苛まれてもそれでも歩みを止めなかつた不器用なロマンチスト。

良く知つてゐるあの人と同じ目

遠い日を見ているように
遠い人を見ているように

ただ、あの水平線を望む

「だからどうか僕に聞かせてくれないかな。君の師の、僕たちが夢見る先生の旅の話を」

ちようどドアをノックする音がする。

扉から微かに漂つてくるのは頼んでいたラズベリーのパウンドケーキの匂い。

それは少し長くなる話にはちようどよい、大きなパウンドケーキだつた。